

御製 五首

平成十六年

宮古島

さたうきびの高く伸びたる穂を見つつ畑連なる島の道行く

御所にて二首

顕微鏡に向かひて過ごす夏の夜の研究室にかねたたき鳴く
台風につきつき来り被災せし人思ひつつ夏の日は過ぐ

小豆島より高松港に向かふ

大島に船近づきて青松園の浜の人らと手を振り交はす

新潟県中越地震被災地を訪ねて

地震により谷間の棚田荒れにしを痛みつつ見る山古志の里

第五十五回全国植樹祭

宮崎県

あまたなるいにしへ人のねむりゐる西都原台地に苗木を植うる

第二十四回全国豊かな海づくり大会

香川県

種ぐさのいのち育くむ藻場にせむと小さきあまもの苗を手渡す

第五十九回国民体育大会秋季大会

埼玉県

真心をこめて開かむと埼玉に三千人の合唱響く

皇后陛下御歌 三首

平成十六年

南静園に入所者を訪ふ

時じくのゆうなの蕾活いけられて南静園の昼あだの穂しと

今年一月、両陛下は沖縄の宮古島でハンセン病療養所「南静園」をお訪ねになった。以前、沖縄本島で同様の施設を訪ねられた時の皇后さまの御歌に詠まれていたからだろうか、両陛下をお迎えする園内には、まだ季節には早いゆうなの花の蕾が一つ飾られており、このことと、入所者との静かな語らいの思い出を重ねて、この御歌を詠まれている。

南静園

全国に十三ある国立のハンセン病療養所の一つ。沖縄の宮古島にある。

時じく

時じくには、二つの意味があり、時を問わず常にあることもいうが、この場合第二の意味で、時に非ず、時節ではないこと。ゆうなの季節にはまだ早く、普通にはまだ蕾も見られない頃であったので、このように詠まれている。

(参考)

いたみつつなほ優しくも人ら住むゆうな咲く島の坂のぼりゆく

(昭和五十年沖縄愛楽園御訪問時の御歌)

踊り

大君の御幸祝ふと八瀬童子踊りくれたり月若き夜に

今年八月、京都行幸啓にあたり、八瀬の人々が京都御所の前庭で踊りをお目につけた。その夜、踊りの人々と共にご覧になった三日月を若い月としてお詠みになつている。

八瀬童子

八瀬は京都左京の一地区。この村の人は昔より八瀬童子と称し、朝廷の重要な儀式や天皇の行幸の際に、御輿(天皇の乗り物)をになう役割にあつた。

幼児生還

天狼てんらうの眼も守りしか土つちなかに生きゆくりなく幼児をさなご還かへる

中越地震の被害者の一人であった幼児が、四日ぶりに土石の下から救出された喜びを詠まれた御歌。空におおいぬ座のシリウス(天狼星)が登る季節、ある時は天狼の眼も守ったのだろうか、と詠まれている。

天狼

天狼星、おおいぬ座の首星シリウス

ゆくりなく

喜ばしい思いがけなさをいう時に用いる。